答申　本文
「青少年がつどえる場の提供や世代間交流ができる仕組みなど、
地域における青少年健全育成のあり方について」

はじめに

中学生・高校生の年代は、思春期・青年期を迎え肉体的にも精神的にも大きな変化が見られ、社会への関心が広がり、いろいろなことに興味を抱く時期である。そして、自分の好きなことや興味のあることに積極的に取り組み、あふれるエネルギーを発散させる傾向がある。しかしながら中には、忍耐力に欠け根気がなく、無関心・無気力と言われる中学生・高校生もおり、彼らは、学校の部活動や地域の行事などに積極的に参加できず、そのエネルギーを発散させる機会を失っている。また、本来安らぎの場となるべき家庭にも自分の心の落ち着く場所が見出せず、問題行動に走る者も見受けられる。さらに、今日では、パソコンや携帯電話・電子メールなどの普及をはじめとする情報化社会の著しい進展により、人と直接会うことが少なくなり人間関係の希薄化も進んでいる。

このような状況の中、人とのつながりを大切にし、心豊かな青少年を育むためには、中学生や高校生の特性をふまえ、彼らが気軽に集まり心を安らげ、エネルギーを発散することができる場所とその機会を提供することが重要となる。

中高生の現状と課題　－アンケート調査から見えてきたもの－

本協議会が中学２年生、高校２年生を対象に実施した居場所のアンケート「教えて！自分らしく過ごせる時空間」（以下「居場所のアンケート」という）を見ると、次のような中高生像が浮かび上がる。

1　学校･家庭への関心

「学校が好きですか」の問いに「好き」と回答した生徒は、中学生で 44.1%、高校生で 44.5%であり、その理由として中学生・高校生の男女とも「友達がいること」を１番目にあげ、友達とのつながりを大切にしている。特に中学生の女子においては 80.0%の高い比率となっている。また、家庭については「好き」と回答した生徒が中学生で 68.4%、高校生で 58.9%であり、「どちらとも言えない」は中学生で 24.3%、高校生で 36.3%である。

これらの結果を見ると、学校や家庭には比較的健全な関心を示していると思われる。

２　地域への関心

自分が住んでいる地域について「好き」と回答した生徒は中学生で 26.5%、高校生で 32.2%であり、「どちらとも言えない」は中学生で 69.1%、高校生で 61.0%となっている。

地域への関心度は「どちらとも言えない」の比率が高いように、地域に関心を示していない生徒も多く見られる。彼らがさらに地域に興味を持ち、地域が好きになっていくように取り組んでいくことが課題となる。トライやる・ウィークなど地域とのつながりの機会もあるが、青少年が自分たちの存在をアピールできる機会や場が、地域にはまだまだ少ないのではないだろうか。

３　部活動の状況と放課後の過ごし方

今回のアンケートでの部活動への参加率は、中学生の男子で 63.1%、女子で 84.5%、高校生の男子で 65.4%、女子で 66.2%となっている。中学生の女子を除けば３割を超える生徒が部活動に参加していない状況である。また、部活動

がないときや部活動に参加していない生徒の放課後の過ごし方では、中学生・高校生の男女ともに「遊ぶ」や「寝る」、「ゴロゴロする」などの回答もあり、友達とのつながりやエネルギーを発散させる機会を失っている者もいる。

４　悩みの相談相手

悩みがあるときの相談相手についての問には、ほとんどが友達や家族を相談相手と答えているが、中学生の男子で 33.8%、女子で 22.5%、また、高校生の男子で 30.9%、女子で 12.3%が「だれにも相談しない」と答え、悩み事を「だれにも相談しない」という生徒が多くいることが分かった。これは、思春期特有の傾向でもあるが、家庭をはじめとした人間関係が希薄化している今日、学校や行政はもとより、地域社会も共に連携して対処していかねばならない課題となる。

５　居場所の現状

中高生の「今、一番落ち着くところ」としては、中学生の男子で 50.7%、女子で 65.3%、また、高校生の男子で 51.7%、女子で 51.9%が「家」、「自分の部屋」と回答している。まちの中の居場所としても、「家」や「自分の部屋」と同様に「リラックスできるところ」、「癒されるところ」、「くつろげるところ」を求めている。

青少年のつどえる場の開放に向けて

ハード面では、青少年のつどえる場の新たな創設について、その必要性を認めるものであるが、まず、既存の公共施設を青少年がくつろいだり、楽しんだりできる場所として確保し、その存在や利用方法を十分に青少年に伝えながら

効率よく利用していく方策を講じていく必要がある。

ソフト面では、地域の年中行事などに青少年を企画の段階から参画させ、一定の役割を持たせながらその取り組みを継続させていくことが、青少年の社会参加意識の高揚と責任感や自主性を育む機会となるとともに、絶好の異世代交流の場となることと捉え、これらの活動を支援していく必要がある。

これまで、機会あるごとにさまざまな取り組みを模索してきたが、さらに地域を中心とした運動面、文化面での取り組みを提言する。

なお、この提言が青少年の健全育成にとって有効に作用し、青少年が自主性を育み自己実現を可能とするためには、大人は、青少年の言動や要求を一方的に規制することなく、彼らの自主的な行動を十分に許容し、温かく見守っていかなければならない。

「つどえる場の創設」

1. 中学生向けコーナーの充実

居場所のアンケートや市民意識調査（平成１４年９月実施）によれば、図書館などに気軽に利用できる学習室を設置してほしいなどの要望がある。

図書館や公民館に、中学生の読書や勉強の場として、中学生向けの図書を備えた気軽に利用できるコーナーを設けるとともに、既存のコーナーについては、その内容を充実させていく必要がある。

２.「若者広場」の創設

モデル事業として、余裕教室や公民館の一部を放課後から午後７時ぐらいまで気軽に立ち寄れる「若者広場」として整備し中学生、高校生に開放する。

「若者広場」は青少年の自主性を育てる場所とし、その整備にあたっては、アンケート調査による青少年のニーズの把握や利用上のルールづくりなどに青少年を参加させることが望ましい。

３. スポーツ公園･自由広場の整備

人々に一番身近な街区公園はかなり整備されているものの、野球やサッカーなどは危険であるとして禁止されているところがほとんどである。また、運動ができる公園もあるが、その利用については抽選になるなど、自由に気軽に利用できる状況ではない。気軽に簡単なボール遊びができるような広場を既存の公園や軌道・自動車道の高架下など、ごく身近なところに整備することも一案である。

さらには、バスケットリング・サッカーゴールなどを備え、多目的にスポーツができる公園や児童向けの「プレイパーク」のような青少年向けの遊び場・空間としての自由広場を拡充していく必要がある。

４. まちの中の「居場所」

居場所のアンケートによると中高生は、まちの中の居場所として自分の部屋のような「リラックスできるところ」、「くつろげるところ」を求めている。

青少年の「自由な空間」として、商店街の空き店舗などを利用し、マンガ本が読め、友達とおしゃべりができる居場所の創設を提言する。

「社会参加の場の重要性と提供」

1. 異世代交流の場の創設

地域の年中行事などは、青少年が進んで参加することにより、絶好の異世代交流の場となる。地域資源（人的、物的）の把握と情報の提供を行い、青少年が積極的に社会に参加する機会と異世代交流の場となる、地域主導型の年中行事や地域の交流活動をなお一層支援していくことが必要である。

２. 地域サークル※と地域リーダーの活用

本市では小学生や地域住民を対象として各地域で体育振興会が活発に活動し、体育指導員などの努力により指導も行き届いている。中高生のためには、兵庫県が推進する「スポーツクラブ２１ひょうご」においても、学校の部活動以外の彼らのニーズにあったスポーツを把握、組織化し、それを得意とする大学生・大人の指導者を地域から発掘し、地域リーダーとして活用していくことが必要となる。

また、スポーツに限らず文化的な取り組みについても、地域の指導者による活動を展開していくべきである。生涯学習「宮水学園」の受講生や高齢者など青少年の身近な存在である地域の人々が、それぞれの豊かな経験や知識を青少年に伝え、それを受け継いだ青少年は、さらに後輩に伝えていくシステムを構築する必要がある。地域の有能な人材を活用し、青少年が主体となり自主的に活動する「地域サークルづくり」を提案する。

※地域サークル

学校の延長とならない形で子どもたちが自由に好きなことが出来る組織で、地域の人々がリーダーとなり、子どもたちと一緒に楽しみ活動するなど、管理指導型とならない仲良しグループ的なサークル

３. 青少年関係団体との連携

青少年の健全な成長に欠かすことのできない青少年の社会参加や異年齢間の交流などについては、青少年愛護協議会や子ども会など地域の青少年関係団体の活動が大きな推進力となってきた。しかし、多様な価値観を持つ青少年の社会参加を推進していくためには、既存団体の活動の成果を踏まえつつ、ＮＰＯ（民間非営利活動団体）などの新しい力も青少年健全育成の推進力としてさらに活かしていく必要がある。

地域のさまざまな取り組みは、それを継続することでさらに大きな成果を生み出していく。地域の息の長い活動を支えるため、青少年関係団体などとの連携をなお一層深めていかねばならない。